

甲状腺腫瘍の内視鏡手術で第1助手を務める片山さん
(右から3人目)と執刀医の清水さん(同4人目)
—片山さん提供



ベラルーシ訪問 旭医大・片山医師

内視鏡手術「喜ばれた」

帰国報告 「医療支援まだ必要」

チェルノフイリ原発事故が起きたウクライナ(旧ソ連)の隣国ベラルーシを10月に訪れ、医療支援を行った旭川医大耳鼻咽喉科の片山昭公医師(41)が帰国した。現地の患者の甲状腺の腫瘍摘出を、傷跡があまり目立たない内視鏡手術で行い、「傷口が小さいと患者に喜ばれた。現地への医療支援がまだまだ必要なことを痛感した」と振り返った。

(田口谷優子)

片山さんはベラルー

シで現地医師の指導などを行っているNPO法人「チェルノフイリ医療支援ネットワーク」(福岡)の派遣チームの1人として参加した。

10月5日から12日ま

で同国に滞在し、7日に西部にあるフレスト州立病院(940床)で手術を行った。同国で長年ボランティアをしている日本医科大学内分泌科の清水一雄主任教授が執刀し、片山さんは第1助手を務めた。

患者は、事故が起きたチェルノフイリ原発から240キロ離れたブレスト州で生まれた30代女性。現地で通常行われている手術では、L字形やU字形に10センチ

があるという。内視鏡手術では、傷跡が約4センチと比較的小さい上、入院期間が短くてすむ。

女性は日本で手術を受けた女性の傷跡を事前に見て「跡が目立たないから安心」と内視鏡手術を受けることにした。実際の手術は、病院側が調達予定だった内視鏡で腫瘍を切除するための器具が用意されておらず、予定外の器具を使ったため、想定していた時間の倍の3

時間かかった。手術室の設備も十分とはいえず、今後同手術を行うには多くの課題を残しているという。

片山さんは「日本で勉強したいという医師も多かった。患者への負担が少ない内視鏡手術が日常的にできるようになってほしい」と話している。ベラルーシでは1986年の原発事故後、甲状腺がんが増え、事故との因果関係が指摘されている。